



光線過敏症

だんだん日が長くなってきており、ウォーキングが趣味の私にとっては喜ばしい。外を長時間散歩にあたって、私が気をつけていることが2つある。それは水分補給と夏でも長袖を着ることだ。夏の日焼けはやけどの一種なので避けるのはいうまでもないが、クスリの副作用にも光線過敏症がある。光が直接悪さをするのではない。体の表面に付着した薬の成分や、体に吸収されて皮下に拡がったごくわずかなクスリの分子が紫外線にさらされて化学反応を起こし、それが直接に皮膚を傷つけたり、アレルギー反応のもとになったりする。これが薬剤性の光線過敏症である。貼り薬の場合には貼った部分の周囲やはがしたあとの部分に出るのでわかりやすいが、飲

み薬の場合には日光の当たった部位全体に見られるため、強い日焼けと取られることもあり、あらかじめの注意が必要なのである。ひどい場合には水ぶくれが一面にでることもあり、決して無視できない副作用だ。原因になるクスリは種類が多く、代表的なものとして消炎鎮痛薬、抗菌薬、降圧薬などの一部がある。私は外来で光線過敏症の可能性のある湿布やクスリを初めて処方するときには、必ず直射日光には気をつけるように、皮膚がおかしいと思ったらすぐに教えて頂くようお願いをしている。いずれにせよ、長時間の直射日光は体に悪いのはまちがいない。

北里大学医学部 教授 熊谷 雄治

